

第2 教育研究団体の意見・評価

○ 日本国語教育学会

(代表者 桑原 隆 会員数 約2,600人)

T E L 03-6801-5951

1 前 文

新課程初年度ということで、第3問に非連続テキストも含む「実用文」の問題が加わって、全体の傾向が変わったが、本試験と異なり、第2問に「ノート」、第5問に他者による論評がある一方、第1問や第4問はセンター試験時代に戻ったような出題になっている。

2 試験問題の程度・設問数・配点・形式等への評価

第1問 妥当である。ただ本文内容の背景が古く、注で補っているが受験者にとって把握しにくい点があったのではないかと感じる。また特に東京都出身者に有利な文章になっている点が気になる。

問1 (エ)の選択肢が訓読みで調整を感じるが、傍線部がすべて音読みの点は気になる。

問2 前半部で用語や概念の定義付けを行う構造は大学での論文の読みにもつながり、問うべき出題。ただ本文全体の理解にも関わるので、導入の出題として難易度は下げたほうが良かった。

問3・4 妥当。問4では誤答③が紛れとなるか。

問5 妥当だが、正答②「積極的に享楽」がやや言い過ぎにも見える。誤答①も紛れとなる。

問6 表現、構成を問う問題は必要だが、第3問で問われる力と重複する点は懸念される。適当でないものを問う出題形式にしないで良いのではないかと感じる。

第2問 登場人物の丁寧な心情把握を求められる作品で妥当。本試験第2問と同様に、生きづらさといった現代的な問題とも重なる点も好感を持つ。

問1 妥当。(ア)「きらいのある」が単独の語句として出題された点は気になる。

問2 導入として妥当。問1(ア)「きらいのある」を含んだ記述を読まないといけないところで、重なりが生じている点が気になる。

問3 「澄香」にとって話をするを「私」がどう捉えているかを尋ねる問題であるため、設問にてその点を明示した方が良かったのではないかと感じる。

問4 作品の広いところから「私」について考える必要のある問題で、傍線部C「さらに」以降を反映した選択肢を選ぶ必要があり、文学的文章の出題として好適。難易度も問4として妥当。

問5 妥当。

問6 根拠を持って文学的文章を読むという点を示す狙いがあったのだろうが、ノートにする必要があったかは疑問。(i)はノートという問題形式のため、Aさんが「わたし」の思いを解釈している点が前面に出、誤答②③等、解釈に踏み込んだものを受験者は選びたくなるのではないかと感じる。特に(i)は単に括弧の表現効果を問う設問でも良かった。(ii)は誤答①が紛らわしい。

第3問 本試験に比べ、実用文を問う形式として狙いが明確で妥当。【構成案】という示し方も書くことと関わり妥当。基本的に選択肢から資料を確かめるもので、二重三重に作問者の意図を読み取る形になり、こうした資料の読み取りを国語科として今後も行っていく必要があるかは疑問。また、第3問全体(本試験、追・再試験含め)として作問のバリエーションが続くのか懸念する。

問1 特に気になる箇所について指摘はなかった。資料のレイアウトは今後も検討して欲しい。

問2 (i)のみ【資料Ⅲ】を理解した上で、選択肢から正答を選ぶという従来の試験に近い頭の

使い方をしている問題となっている。図で表現する力を求める点につき賛否が分かれるだろうが、実用的な文章を問う問題としてはこうした思考の流れの方が即しているように思われる。

問 3 珍しい形式だが、第 3 問では、基本的に選択肢から資料内容を確認、情報を読み取るため、こうした形での適当でないものを複数選ぶ問題と相性が良いと思う。

第 4 問 追・再試験の古文は、旧来のセンター試験に回帰した印象があり、本試験とのバランスの点で課題が残る。分量や読みやすさ、新課程を意識したメッセージ性などの面で、本試験との方向性の違いが見られた。文章の難易度としては、古文が難しく漢文が易しいという構成であり、試験全体の均衡は良いものの、本試験との差が大きい。本試験と追・再試験の傾向を近づける工夫が求められる。

問 1 妥当。センター試験時代の出題形式を踏襲している。

問 2 難易度は高くない。「適当でないもの」を選ぶ形式であり、誤答の選択肢の後半が読解の手がかりとなる構成になっている。

問 3 妥当であるが、解答根拠となる箇所が限定的であり、より長い文章全体をまとめる形の出題であれば望ましかった。選択肢が単純すぎる点も課題である。

問 4 丁寧な読解を促す良問であり、基本的な読解問題として適切である。

問 5 内容合致問題としては適切とはいえず、選択肢の作り方に課題が残る。作者の解釈に寄り添う形での解答が求められ、受験者に不要な負担を強いている。部分的な解釈に依存した構成となっており、場面の流れを捉える力を測る問題にはなっていない。4 択でも十分であった。

第 5 問 文章自体は明晰であり、読みやすいものの、単独の問題としてはやや物足りなさがある。しかし、第 4 問とのバランスを考えると、難易度としては妥当といえる。

問 1 基本的な言語知識を問う問題として適切。受験者の学習の成果が反映される設問。

問 2 妥当。句法をそのまま問うのではなく、言い換えを用いた出題で、工夫がみられる。

問 3 空欄補充の形式は適切とはいえず、別の出題方法を検討する余地がある。また、単純な対比構造を把握すれば解答でき、設問の意図が明確ではない。一方で、本試験と追試の両方で比較の句法が出題されており、日常的に使用しない語彙を含むため、学習の成果を測る問題として一定の評価ができる。

問 4 第一段落全体の理解を問う適切な設問であり、聞くべきポイントが明確に設定されている。選択肢にも紛れがなく、丁寧な作問となっている。また、傍線部を後半に設定することで、前半部分の再読を促す工夫が見られる。選択肢の作り方にはさらなる工夫の余地がある。

問 5 選択肢に紛れはなく、難易度も適切であるが、構成が単純で、本文の深い読解を必要とせず、傍線部と選択肢の対応だけで正答を導けてしまう点に課題が残る。

問 6 易しく、選択肢にも紛れはない。複数テキストの形式をとっているが、比較を求めるものではなく、本文の内容理解にとどまる。選択肢が冗長で、受験者の負担が大きい点も気になる。『呂氏春秋』の引用を用いる必然性が薄く、単体でも内容合致問題として成立する。

3 総評・まとめ

全体として本試験より難度が高いのは追・再試験の場合は致し方ないとして、第 3 問などは今後新たなパターンの問題が豊富に作れるか否かはやや心配。センター試験時代のような従来型の問題も、本試験、追・再試験ともあるので、部分的に「先祖返り」したような印象もあった。

4 今後の共通テストへの要望

本試験とは、比較の問題の出し方などは異なっている。これは追・再試験受験者に予見を与えないためかもしれないが、それならそれで今後もその方針を貫いてほしい。